豊沢豊先生を偲ぶ
ー光物性研究会誕生のころー

松井　敦男
（初代組織委員長）

豊沢先生が9月6日、お亡くなりになりました。84歳でした。気丈で意思の強い先生でしたが、昨年11月に路上で転ばれ、大腿骨骨折で、お歩きになることが出来ませんでした。ひと時入院もなされたようですが、最後はご自宅で療養なされていました。夫人が付き添われ、お話しもされておられました。飲み物を求められ、夫人が、席を離れられた間に、天寿を全うされました。ご他界が一寸早すぎたのではないでしょうか。

昨年の7月に豊沢先生より長いメールを頂戴いたしましたが、ご自宅周辺に三つの川が流れており、武蔵野の面影を残す景色であることが書かれてありました。お体の状態も細かくお書きくださりました。花村榮一先生が、お見舞いされ、花村先生のご自宅庭で小熊が二匹引っかかったことなど、楽しく会話なされたことも知りました。光物性研究会にもご関心深く、平成22年度から、石原一先生が組織委員長をお勤めになることに期待を寄せられました。また、1994年に立ち上げたEXCON（励起子国際会議）が現在も続いており、先生のご研究を受け継ぐ人達が大勢いることをお喜びである旨書かれておられました。

豊沢先生は、理論家でいらっしゃいましたが、常に実験家の研究成果に注目され、実験と密着する理論をお作りになり、光物性研究を先導され、若手研究者をはげましていただきました。学者としてだけでなく人間としての先生を尊敬される方が多く、光物性研究者の視線が豊沢先生に集まっておりました。

しかし、光物性研究が常に順風満帆であったわけではありませんでした。1980年代の後半には、危機が訪れました。当時は、科研費を貰って研究会を開催しておりましたが、毎年科研費が得られるわけではなし、研究会を開催しても、毎回よく似た顔ぶれとなっていました。資金難で若い人が少なかったのです。1989年には、科研費も得られず、10人ほどの人が名古屋に集まり、研究会を開催しました。宿泊費と懇親会費をすべて豊沢先生と伊藤憲昭先生がご負担下さいました。

特定個人にご負担いただいて研究会を開催するようではいけない、なんとかして、特定個人からではなく資金を得て、研究会を開催しようという雰囲気になりました。翌1990年に、その趣旨に沿った最初の光物性研究会を、上町台地（なにわの都跡）にある大阪なにわ会館で開催いたしました。参加者は80人くらいでした。このときは村田学術振興財団からご支援をいただきました。知人の居る会社を訪ね、寄付をお願いして回りました。企業から研究会資金を得るのは邪道である、との批判もありました。でも、たとえ科研費をいただいても、もとは、企業や個人の税金ですから、企業から援助を頂いても、不具合なことはないと、私は考えておりました。やがて企業アレルギーも消え、今のように、企業展示や広告による収入も受け入れる環境となりました。

研究会は、継続して開催するという約束があったわけではなく、毎年、相談して、賛成が得られれば開催しました。二度目の1991年研究会は、三重県伊賀上野市で開催しました。幸い、松下電器産業株式会社（現在のパナソニック）より、水野博之副社長（現在大阪電通大学副理事長）

のお声がかりで、80万円の支援金をいただきました。西田良男先生のつてで三菱電機より30万円、その他、7社から資金を得ることができました。

この間、研究会のお世話をする上で、名称など、企業の人達に理解していただきやすくする必要があることに気がつき、この年1991年より、研究会世話人という名称を改め、組織委員会にいたしました。私達は当初より、論文集を作りました。論文集は文献としての価値以外に、企業や外部の人に、光物性研究会がどのようなものか、知っていただく、貴重な資料になりました。

また、1991年の研究会では、優れた研究発表に、賞を出すことを試みました。遊び半分の気持ちで、「言葉はっきり賞」とか「ポスター綺麗賞」などという名の賞を作りました。遊び半分というのは、不真面目ではなく、真面目な活動の中に遊び心を入れるということでした。遊びは、学問や芸術の温床であると考えておりました。賞の授与に対し、研究会に賞はなじまないという、批判の声があり、次の年より、賞を無くしましたが、現在、見直され、受賞記録が学生の履歴に書かれ、奨学金を得るとか就職活動に都合がよいと聞いております。

三年目（1992年）の研究会は、上町台地にある大阪国際交流センターで開催されました。このときは、櫛田孝司先生主催の日台固体分光ワークショップとの共催で、11社（大学を含む）よりの経済支援を得ております。

四年目（1993年）は（播州）赤穂市文化会館ハーモニーホールで開催しました。後藤武生先生（東北大学）を代表者とする文部省科学研究「ナノスケール構造半導体の光学機能の解析」との共同研究会でした。光物性研究会では、遠隔地からの参加者に、毎回少額の旅費援助を行っておりましたが、後藤先生の科研費による援助で、研究会独自の負担は少なくなり助かりました。加えて、関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団から支援をいただきました。この年、資金支援企業数が22社あり、際立って多くなりましたが、嶽山正二郎先生が猛烈な資金集めの活動をなさってくださったお陰でした。こうして資金に余裕ができ、次年度に繰り越金がでるようになりました。

研究会は、上にも書きましたように、1990年は、なにわ上町台地、1991年は、忍者や松尾芭蕉で知られる伊賀上野、1992年は再び上町台地、1993年は、播州赤穂と、日本史に関係の深い土地で開催されてきました。その後、三年間1994～1996年は、奈良県新公会堂で開催しました。奈良は、シルクロードの終点であり、たくさんの宝物が正倉院に保存されております。1996年論文集のロゴに、秋の正倉院が描かれております。口頭発表の場所に、新公会堂の能楽堂を利用いたしましたが、文字どおり檜舞台でした。口頭で研究発表するよい場所を得たのは幸運でした。

1997年以降は、大阪市立大学に建設された学術情報総合センターをお借りして会合を持つようになりました。論文集には、励起子が模式的に描かれたロゴが採用され、現在も同じロゴが使われております。豊沢先生は、長年、励起子の研究に打ち込まれ、光物性研究者の多くが励起子に関係する研究をしておりますので、励起子のロゴが描かれていますことは、豊沢先生に敬意を示すことにもなっていると理解しております。豊沢先生は、1998年に、光物性研究会で、「生命の起源と自然選択の原理」と題した特別講演をして下さいました。それが先生の最期のご講演ではないでしょうか？

励起子については、現在「EXCON」と略称される国際会議が1994年以来、二年おきに開催されておりますが、その立ち上げには、オーストラリアの Professor Jai Singh が、赤穂での光物性研究会に参加され、私に開催案内をするよう希望されました。その縁で、伊藤憲昭先生と一緒にお

手伝いをさせていただきました。この国際会議 EXCON には、毎回、日本からの参加者が一番多いですが、光物性研究会が支えになっていると思われます。

光物性研究会の立ち上げに関係して、資金面と活動の一部を中心に経緯を記載いたしましたが、我々の光物性研究会は、大きな特徴をもっております。会合での質疑応答が、常に、温かく友好的な雰囲気でなされてきました。物理学会光物性分科における先輩諸先生達（上田先生、神前先生、小林先生、塩谷先生、豊沢先生など）の、温和で親切さに溢れた質疑応答の雰囲気は光物性研究会に引き継がれ、研究会の雰囲気を盛り立てる貴重な遺産になっております。

今冬の光物性研究会は12月に開催されますが、21回目の光物性研究会となります。この研究会を立ち上げる契機となったのは、冒頭に記しましたように、光物性研究にたいする豊沢、伊藤（憲）両先生の情熱に動かされたことによります。初期数年間（1990～1993年）の組織委員のお名前（敬称略）を書かせていただき（除松井敦男）、研究会立ち上げへのご尽力にお礼を申し上げたいと思います。1990年、平井正光、伊藤憲昭、西村仁、1991年、平井正光、伊藤憲昭、加藤利三、西田良男、櫛田孝司、西村仁、小松晃雄、1992年、平井正光、伊藤正、谷村克己、櫛田孝司、西村仁、小松晃雄、飯田武、1993年、後藤武生、栗田進、神野賢一、櫛田孝司、小松晃雄、西村仁、高木芳弘、嶽山正二郎の諸先生、ご苦労様でございました。

豊沢先生は、長年物性研に籍を置かれ、その間に多くの人材を育成され、光物性研究の発展に寄与されました。残念なことに、他界されましたので、光物性研究を発展させた豊沢先生に感謝しつつ、研究会立ち上げ時の様子を報告させていただきました。当初80名ほどであった研究会参加者数も今では270名となり、毎年、盛会でございます。今後益々立派な研究会として存続されるものと期待いたします。

数年前のことでしたが、豊沢先生は関西にお越しになり、複数の光物性関係者にお会いになられました。私は神戸元町ユーハイムでお目にかかり光栄でした。神前熙先生や小林浩一先生の闘病状態などお聞かせ下さいました。そのとき、仏教では、年忌が行われているが、今回は、マイナス何回忌かのつもりでいると仰いました。豊沢先生特有の冗談めいたお言葉でしたが、そのときが、先生にお会いする最後の機会となるとは、思ってもいませんでした。豊沢先生には折に触れ、光物性研究会や EXCON の様子をご報告いたしておりました。今はそれが叶わぬこととなりました。

謹んで、豊沢先生のご冥福をお祈りいたします。

平成22年10月18日